

周辺からの記憶8

～2012年度 宮城（仙台・多賀城）～

村本邦子（立命館大学）

2015年6月27日～7月5日、JR西日本あんしん社会財団の助成を受け、京阪三条駅にて、「未来のための思い出 ココロかさなるプロジェクト：団士郎 家族漫画展」を開催した。「心の防災」をテーマに街頭インタビューを試みたが、たくさんの方が足を留めてくださり、20名の院生・修了生たちの協力も得て、なんと250もの声が集まった。分析作業は大変だが、なかなか興味深い結果が出るのではないかと思う。少しずつ紹介していきたい。引き続きWeb展をやっているので（2016年5月30日まで）、是非、訪問してください（<http://www.cocoro-kasanaru.jp/>）。



あわせて、『臨地の対人援助学～東日本大震災と復興の物語』（晃洋書房）も刊行された。是非ご一読ください。

いよいよ、今年もむつから、5年目のプロジェクトが始まる。いろいろな形でお力添え頂いている皆さんに感謝するとともに、新たな出会いと展開を楽しみにしている。



準備

初年度は開催を見送った宮城だったが、今年は何とか実現したかった。さまざまなルートから色々な可能性を検討していたが、7月に入って、宮城で災害子ども支援窓口を受託している「災害子ども支援ネットワークみやぎ」「特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎ」が受け皿となってくれることになった（2012年度、政府は被災三県に災害子ども支援窓口を指定した）。

チャイルドラインの方が動いてくださって、8月には、「せんだい男女共同参画センター」の共催で、「エル・ソーラ仙台」を会場に使わせてもらえることが決まった。「エル・ソーラ仙台」は、仙台駅に隣接した31階建の再開発ビル「アエル」の28・29階に入居する仙台市の男女共同参画施設で、「エル・パーク仙台」とともに、子育て、女性、家族支援の機能を担っている。実は、昨年9月の営業回りでは、「エル・パーク仙台」に立ち寄って話をし、「エル・ソーラ仙台」の方にもつなげてもらったが、すでに企画が一杯だと断られた経緯があった。「アエル」は、1998年の完成時点では東北最高層だったそうで、仙台のランドマークとなっている。

さらに、仙台市内よりも沿岸部に支援ニーズがあるということから、多賀城市でも小さなプロジェクトを試みってみることになった。仙台では、10月1日～6日の漫画展、6日（土）のプログラム、多賀城では、7日（日）の漫画展とプログラム。企画内容に

ついて相談する中でわかってきたのは、どうやら、ニーズはスタッフの養成と個別相談（スーパーバイズあるいはコンサルテーション）にあるらしい。相手方のニーズに応えることは重要だし、柔軟であるべきだが、バックボーンは必要である。私たちのプロジェクトの趣旨は、個別対応よりコミュニティへの働きかけにウェイトがあり、ひとりひとりと出会いながらも、そこから視点を社会へと広げていくこと、心理主義的介入の枠を破っていくことにある。そうでないと十年続かないだろうと思うからだ。

時期的には、現地で被災者支援にあたっている人々に疲れが出ていること、時間経過とともに表れてきた被災者の「心の荒れ」をどう受け止め、静めていくかに苦慮しているということだった。仮設住宅の子どもたちの不機嫌や暴力が増えてきたのだという。その一方で、支援にあたっている人たちの研修疲れの声があがっており、貧困、離婚、発達障害など、ハイリスクへの対応が課題になっているという話も聞いた。全体が日常の再構成に向かおうとすればそれだけ、もともと負荷を抱えていた人々の負荷がさらに大きくなって取りこぼされていくことになるだろう。個別対応や支援者への研修で解決できない問題である。とりあえず、今回は、外部にも開いた支援者支援セミナーとプラスアルファで個別質問コーナーを設けることにした。

9月に入って、ようやくチラシもできあがり、今年宮城でのプロジェクトの開催が実現することになった。

10月5日、多賀城市の仮設住宅へ

新幹線で仙台へ。駅近くの宿にチェックインして荷物を置いてから、漫画展会場のエル・ソーラに立ち寄る。なかなか立派な建物で、活気ある駅前の様子からはもはや震災の痕跡は見えない。とは言え、仙台市のHPによれば、死者・行方不明者は700人を越え、津波による住宅被害は全壊2.5万件以上、大規模半壊・半壊10.5万件以上というのだから、被災状況による差は大きいはずである。実際、いざJR仙石線で多賀城へ移動しようとする、沿岸部の線路はまだ復旧されていないことがわかる。



多賀城駅からタクシーを拾い、多賀城公園野球仮設住宅へ向かう。チャイルドライン代表の小林純子さんのはからいで、仮設住宅の様子を見せて頂くことになったのだ。宮城県HP(2012年8月31日現在)によれば、多賀城市の死者は200人を越え、住宅被害は全壊・半壊合わせて約5500件、仮設住宅が6ヶ所あるとのこと。短い道中ではあったが、タクシーの運転手さんは、車を走らせながら、あたかも実況中継をするかのように被災状況を話してくださる。JR

多賀城駅周辺は津波が1.8mの高さまで上昇、津波が引くのに丸2日かかり、橋のあたりにはボートが木の葉のように積み重なっていたという。

2台のタクシーに分乗したが、もう1台の方でも同様に被災状況を聞かせてもらっていた。1年半経った今、過去を振り返って外から来た人に話したい時期になっているのだろうか。私の乗った車の運転さんの家は、津波は入ったものの住める状況だということだったが、もう1台の方の運転手さんは仮設に住んでいるとのことだった。地震が来た瞬間は浜に向かって車を走らせていたが、「豆腐に乗ったような」揺れに慌てて方向転換し、神社のある丘へと向かって命拾いされたそうだ。生々しい話に鳥肌が立つ思いだが、このあたりの人々は、多かれ少なかれ、そういう体験をされているのだろう。



仮設住宅は緑に囲まれた小高い丘の上にあった。入口付近に黄色い図書館バスが止まっていて、NGO「幼い難民を支える会」のスタッフが子どもの遊び相手をしていた。100軒ほどが暮らしているそうだ。個人情

報をもらえないので、どのくらいの世帯に子どもがいるのか不明だが、学童前の子どもが 10 人は確認できている。中高生を入れるともっと多い。



集会所の中に 4 畳半くらいの小さなキッズスペースがあるが、子育て中のお母さんたちはチャイルドラインが入る金曜しか来ない。子どもがうるさいと苦情が出ることを恐れているらしい。外で遊べる日はまだ良いが、寒くなってくると屋内での遊びのスペースが限られているので、問題が顕著になるだろう。せめて 1 日 2 時間だけでも集会場を子育て中の親子が使えるようにと提案しているが、話し合いはなかなか前に進まないそうである。

棟続きの仮設住宅では、隣の声がうるさい、子どもがうるさいなど、本来なら問題にならないようなことが問題になる。子連れが迷惑がられるため、親が子どもを必要以上に叱る、普通なら許容できることができなくなっている。多賀城中心部では核家族が多いが、沿岸部では 2 世帯、3 世帯住宅が多く、広い敷地にそれぞれの世代が

各々家を建てて住んでいたもので、6 畳+4.5 畳の仮設住まいは大きな負担を強いている。若い人たちはローンを組んで仮設住宅を出て行くが、年金生活の高齢者は収入源がないので取り残される傾向にある。仮設住宅が閉鎖されて公営住宅に移行するとき、その家賃に補助が出るのかなど、今後の課題は多い。震災から 1 年半になるが、風呂の追い炊き機能が設備されたのは、ようやく最近だという。

そんななか、15 市町村に通って支援を行っているチャイルドラインは、多賀城公園球場仮設住宅をモデル事業として位置づけている。子どもの権利を言いすぎると大人たちが嫌がるので、バランスを取りながら、しかし子どもにとっての遊びの重要性を代弁してゆかなければならない。災害直後は市の役員に「子どものことどころじゃないんですよ」と言われたそうである。どうしても子どもは後回しになる。みんな自分のことに必死で、許容力が落ちる。障害児を持つお母さんが一旦は仮設住宅に入ったが、周囲の目線に耐えかねて半壊した家に帰ってしまったこともあったという。厳しい現実である。

おおぞら保育園

その後、チャイルドラインの車で、多賀城でのプロジェクトを共催してくださるこ

とになったおおぞら保育園へ向かう。小林さんに「コンテナの保育園で、小さな小さなスペースに 20 人もの子どもたちがすし詰め状態になって、見たら涙が出ますよ」と聞き、胸が痛む。しかし、いざ到着してみると、コンテナに大きく描かれたパンダに出迎えられ、へちまが巻きつく階段をトントンと登って小さな入り口からなかに入ると、そこには暖かく明るいスペースが広がっていて、なんだか秘密基地のようなワクワク感がある。夜になっていたのに、小さな1室に子ども3人と先生2人がいらして、子どもたちはおとなしく折り紙などしていた。すし詰め状態を見ていないから言えることかもしれないが、私はこの小さなコンテナ保育園がすっかり気に入ってしまった。とは言っても、園庭もなく、小さな象の滑り台が砂利の上に置いてるだけだった。雨の日は辛かろう。



黒川恵子園長にお話をうかがう。被災当時、黒川先生は、多賀城市八幡、砂押川のほとりにあったクローバー保育園に勤めていた。地震が襲ったとき、先生方は、小さい子どもたちをトランクの中に、大きい子どもたちを机の下に入れ、建物が倒れないように皆で柱を支えた。たまたま配達に来た郵便屋さんと一緒に柱を支えてくれたそう。2日前に起きたM7.3の地震を受け、いざという時のために市役所に避難先を確認し、八幡小学校に避難することを保護者に伝えただけだった。

大きな揺れに耐えた後、どの道に行くべきか不確かではあったが、小雪の降るなか散歩車を押し、手をつないで、いつもの散歩道である砂押川沿いを歩いた。誰からというでなく、いつも散歩の時に歌っているトトロの歌を歌いながら歩いた。途中、逃げ惑う人々と何度か交差したが、道一本違うと被災状況がまったく違い、川沿いも本当は危なかった。考えればぞっとするが、まったくの偶然が生死を左右した。



▲藤原佳世さん撮影

避難先の小学校に着いた時には、すでに大勢の人たちが詰め掛けていて、校門の中に入れてもらえなかった。そこで初めて後を振り返ると、さっき歩いた散歩道に津波が押し寄せていて、「津波だあ！」と慌てて中に駆け入った。小学校の中に入れてなかったので校庭で、園児たちにブルーシートを被せて雪をしのいだという。

クローバー保育園の経営者は、本業が被災したこともあり、同じく被災した保育園を廃園にした。子どもたちの保育と解雇された保育士さんたちの雇用のために、黒川先生は、2011年9月、障害児施設、太陽の家に間借りをして保育園を再開させた。被災後は物件も少なく、たまたまネットでトレーラーハウスの診療所を見かけ問い合わせていたが、12月、いよいよ借りていた部屋を明け渡さなければならなくなり、2012年1月27日、高崎にコンテナハウスの保育園を開園した。被災したときに経営者だった人には市から補助金がおろるが、黒川さんは経営者ではなかったため補助金が出ず、それでも何とか協力を求め、市から土地を借りて、自費でコンテナを買ったという。黒川先生のアパートも被災し、現在のアパートに引っ越すまでは、避難所からおおぞら保育園に通っていた。

コンテナの立つ駐車場は砂利が敷いてあるので、そこで園児を遊ばせるわけにはいかない。テラスを広げる案を模索していたところへ、駐車場を保育園にするのは建築

法違反ではないかと県の土木課に近所の人から通報があったという。駐車場の周りにフェンスを建てたら、また通報。何かするごとに通報されるので、テラス拡張に踏み切れずにいる。以来、なるべく近隣の理解を得られるようにと、草むしりなど町内会のイベントに参加するように心がけているそうだ。お金があったら新しい園舎を建てられるから、「思わず宝くじを買っちゃいました」と黒川先生は笑うが、何ともやりきれない。



▲廃園となったクローバー保育園

仙台でのプログラム

10月6日(土)、仙台市エル・ソーラにてプログラムを実施。女性センターにはさまざまなチラシやポスターが貼ってあって、

活発に女性支援が行われていることが感じられる。昨年、エル・パークを訪れた時には、「まだ女性の問題が十分に見えてこない」と言っていたが、その後、「仙台の女性たちは頑張っているよ」と耳にしていた。

午前中は、団さんの漫画トーク。人は記憶（物語）の塊であり、過去はもちろん、未来はまだ始まっていない物語の時間。大きな被災物語に小さな物語は打ちのめされがちであるが、未来に向けてどのような物語を紡ぎ出すか、復興した未来はそこにあるのではということ、家族漫画を通して多様な「家族の物語」に触れてもらう。「あなたはどのような人ですか？」と尋ねることで、家族についてのナラティブが変化していくことに、支援や問題解決のヒントもあるという趣旨だったと思う。



お昼をはさんで、午後は私が支援者支援セミナーを担当する。まずは、自己紹介を兼ねて、プロジェクトをスタートさせた経緯について話したうえで、レジリエンスという概念について話した。紹介したのは、Mullender(2000)の DV シェルターで行われた子どもたちへのインタビュー調査である。危機的状況において、子どもたちに重要だったことは、①当事者として自分の声に耳を傾けてもらい、真剣に取り扱ってもらうこと ②解決法をさがし、意志決定の援助に積極的に関わること のふたつだった。子どもたちは本来、力を持っており、自分の人生の物語の主人公であることを保

証されることによって、その力を存分に発揮することができるのだ。3人組でレジリエンスを感じたエピソードについてシェアしてもらった後、支援者は自分のケアが後回しになってしまいがちなので、互いにサポートしあおうという話をして、もう一度、シェアの時間をとった。



全貌はわからないが、テーマについてよりも、そこを入口にしてそれぞれ被災体験が語られたようである。15分の予定だったが、ひとたび話し出すとなかなか終われない様子で、後で参加者から「自分たち支援者たちは、まだ十分に被災体験が語れていないのです。こんな時間がもっと必要なんだと思います」と言われた。物語るためのきっかけや枠組が求められているのかもしれない。被災状況も支援状況もあまりに多様だったようだが、互いの声に耳を傾け互いの力を引き出す小さなきっかけになったらいいがと思った。



上山真知子さん&モリスさんとの交流

プログラム終了後、漫画パネルの撤収をすませてから多賀城市へ移動、上山真知子さんとお連れ合いのモリスさんと落ち合う。上山さんとの出会いは、9月の心理臨床学会だった。上山さんのことはすでに聞いていたが、災害のシンポジウムに参加し、フロアから質問した上山さんに気づき、遠くから服の色や形を目に焼き付けておいて、終了後、たくさんの人のなかから探し出して、声をかけた。我ながら目的があればわき目も振らずまっしぐらという性格を可笑しく思うが、それでもこの性格ゆえにさまざまなことが動いてきたのだ。上山さんは山形大学の心理学者だが、自宅が多賀城にあって、震災後、現地で大活躍されていた。

今回のプロジェクトに合わせて約束を取りつけていた。

モリスさんはオーストラリア人の歴史学者で、途中、被災の状況を説明しながら、夜の街を案内してくださる。この交差点には7mの津波が押し寄せ、この左手では火の手が上がった。JR多賀城駅沿いの川は決壊し、川原には死体の山があがった。ご夫妻の住まいはそこからほんの少し上流で辛うじて無事だったが、通りすがりの人々や近隣の方々と助け合って日々をしのぎながら、とにかくできることをと支援を展開されてきた話には感心するばかりだった。

「食いしん坊」というお魚料理屋さんで夕飯を御一緒しながら、お話を聴く。2011年3月の段階で、避難所に子どもの遊び場を作ったり、4月には地元の教師たちのワークショップを開催したりと、非常に早い時期から活動されていた。ストレス対処法を話してもらったら、とても盛り上がり、同職種が集まるとこんなに力になるのだと知ったそうだ。震災直後からたくさんの方から多種多様な支援の申し出が相次ぎ、なかには怪しげなものもあったが、国際NGO プランジャパンの申し出をさまざまな支援をつなげていった。WHOによるPFAを翻訳し、子どもたちが撮った子ども眼線の写真を使った冊子を作成した。また、途中、「食いしん坊」のお嬢さん、土井真理さんが合流したが、実はこの方、ドラムカフェ・ジャパンという会社を立ち上げてビジネスを展開されていたが、震災後、これを使ったコミュニティ支援に力を入れておられた。このドラムカフェというのがなか

なか面白く、後に私も経験することになる。この活動とプランジャパンをつなげたのも上山さんだったが、本当に地域には力強い人々がおられるものだ。



多賀城でのプログラム

10月7日(日)は多賀城でプログラム開催である。仙台のホテルをチェックアウト

して、再び、多賀城市へ向かう。会場となった多賀城文化センターは、新しい立派な建物だが、当初は避難所になり、人々が折り重なるようにして寝ていたそうだ。

部屋の壁に椅子を並べ、椅子にパネルを立て掛ける形で手作りの簡易版ギャラリーとし、その中でプログラムを実施する。メニューは仙台と同じで、団さんの漫画トークと私の支援者支援セミナーであるが、対象が異なることからどのような内容が良いものかギリギリまで迷っていた。実は、早朝に起きて新しいパワーポイントを準備したのだが、開始時のメンバーは保育園の先生方のみだったので、予定変更してパワーポイントは使わず、グループ形式で話すことにした。簡単な自己紹介と、今、気になることをあげてもらおうが、仙台と同様、被災体験を語られる方が多かった。そうこうするうちに、遅れて次々と新たなメンバーが加わり（15人ほど）、進行がとても難しい構成になってしまった。

それぞれの参加者のニーズに少しずつ応答できるよう臨機応変に進行したつもりだが、難しさは、あらかじめ参加者の状況を把握することができなかったこと、狭いコミュニティでの参加者同士の関係性が見えないなかで一緒にやらなければならないことによるものが大きかったと思う。通常のグループであれば、遅れた参加者を受け入れられないものであるが、今回はそういうわけにもいかず、今後の反省として、目的と対象を絞る方が良かったと思った。とは言え、年々、変化するなかで、目的をどこに置き、どのような内容にするのか難しい課題だ。時間

経過とともに被災のことより、一般論に持っていく方がよいのだろうか。一年に一度、立ち止まって振り返ってもらえる機会になればという思いもあるが。もうひとつ感じたことは、被災地の状況は予想以上に厳しく、意識レベルのニーズと本来のニーズにズレがあること、両方を理解する必要があると思った。





今後に向けて

仙台と多賀城、1日ずつというスケジュールはやはり忙しい。じっくり地域の方々と出会うという意味では1ヶ所に絞る方がよいような気もする。仙台は規模が大きく、支援もたくさんあるということから、多賀城に絞ろうかなとも思う。

岩手に関しても、沿岸部である大船渡でやってはどうかという話が出て、その方向で準備を始めている。同じ地点で十年と思って始めたものであるが、十年続けられそうな開催地を特定するのはなかなか難しい。

つづく